

# 菜園から学ぶ〜観ることの大切さ〜

## はじめに

私は、長野県中部にあるあまり大きくない寒村で育ちました。親父とおふくろ、私も入れて男兄弟三人の親子五人と、私が二番子ということで、養子に入った後見役の老夫婦との七人家族で、畑作を主にした、今

で言う專業農家でした。戦後間もない頃は、小麦や大麦、サツマイモ、ジャガイモ、大豆・小豆などの畑作物が主でしたが、昭和三十年代に入ると収入の良いハクサイやキャベツを主にした野菜の栽培が増えていきました。

こんな中、おふくろは、農作業に家事にとそれはそれはいへん忙しい毎日であったと思います。父親と食べ盛りの男の子三人、それに老夫婦二人の三度の食事作りは苦勞したことでしよう。それでも、味噌汁や

煮物、炒め物、漬け物と野菜たっぷりの食事を作り、家族の健康を守ってくれました。高等女学校を出たといっても、おそらく栄養学の知識などなかったと思いますが、日々の生活の中で、野菜の効用について体験的に学んでいったのでしよう。今でも心から感謝しています。

子供の頃こうした日々を過ごしたことが、長野県の農業試験場で野菜の研究に携わるきっかけになりました。在職中は、野菜類の栽培技術改善の研究に携わりましたが、もともとと農薬や化学肥料をふんだんに使う近代農業には疑問を持っていたこともあり、退職後数年を経た頃に、自然農法センターの前理事長の天野紀宜さん、元農業試験場長の川島東洋一さんからお声をかけていただき、それ以来自然農法センター農業試験場で研究のアドバイスをさせていた

だいております。

本稿では、私が県の農業試験場在職中にあった印象深い出来事や菜園作りへの想いなど、自然農法の視点で綴ってみます。

## 菜園作りは楽しく

### やりましょう

以前、ある新聞社の情報誌に家庭菜園についての連載記事を書いたことがあります。そこに最初に書いたのは、「なにを置いても楽しくやること」でした。「お父さん、水やりが遅かったから苗が枯れちゃったよ」、「お母さんそんなに言うんならおまえがやりなよ」などなど、さわやかな青空の下、不機嫌で野菜と向き合ってもいいことは少しもありません。少しは失敗しても、たくさん穫れなくてもいいのです。とにもか

くにも、家族で、ご近所で楽しくやるのが大切です。そこから、家族やご近所の明るく楽しい暮らしが始まります。

## 三つ子の菜園百まで

「三つ子の魂百まで」ということわざがあります。幼児の時期は、人格形成の一番重要な時期ということですが、小さな頃から明るい日差しの下で、お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に、野菜に愛情を持って接することがで



小口 伴二

(公財) 自然農法国際研究  
開発センター評議員

長野県農業関係試験場で、昭和39年4月から平成14年3月まで主に野菜の栽培研究に従事。



できれば、きつと心の優しい大人に育っていくのではないのでしょうか。楽しく取り組んだことが、良い思い出とともに、一生を通じて生活に潤いを与える菜園作りにつながります。そして、その想いが次の世代に受け継がれていきます。

自然農法センター農業試験場の南隣にも松本市の保育園があります。農業試験場では、園児との収穫体験などを通じて交流しており、自然農法への理解を深める機会になっています。

### 野菜作り

#### 「見る」と「観る」の違い

「みる」という漢字には、普通に使われる「見る」と、その他に「観る」や「視る」があります。「見る」が単に目で確認する意味に対して、「観る」や「視る」は、単に見るのではなく事の本質を洞察力を持つてうかがうという意味を持っています。菜園作りも「観る」という姿勢が大切であると思います。私が体験したエピソードなどを紹介します。

(自然農法誌68号にも自然農法技術交流会レポート「自然農法は観察が基本」の中で、自然観察の大切さが述べられています。)

#### ■メロンの苗がおかしいのですが

私が県の農業試験場に入って十年くらい経った頃でしょうか、近くの農家の元氣の良いおばさんが、生育に異常があるメロンの苗を持参して、原因を調べてほしいと言ってきました。春先の少し寒い時期でしたので、冷床のトンネル内に苗があり、異常を示す苗は苗床の周囲に多く発生しているのと、またメロン苗の

症状は、先端部付近の葉が少し萎縮し、色も少し褐変していました。私は、苗床の周囲に発生が多いことと、苗の先端付近の柔らかな葉が褐変していることから、低温障害という見立てをしました。おばさんは、なんとなく不慣れた面持ちで帰りましたが、二三日するとまた見え

られ、「原因が分かりました、ダニがたくさん付いていましたよ。試験場も当てになりませんね」とお叱りを受けたのです。これには参りました。また、失礼な言い方になるかもしれませんが、農家のおばさんが目に見えないような小さなダニによく気がついたものだと感じしました。私はよく見たつもりでしたが、ぼんやりとしか「見て」いなかったのです。ちなみに、ダニの種類はコナダニで、トンネルの被覆に使っている稲わらで編んだ菰(こも)に付いていたと思われまます。これは、たいへん良い教訓になりました。

#### ■葉の裏をよく観察する

先のメロン苗の一件から余り日を置かない内に、近くの農協から育苗中のトマト苗に異常があるから見てほしいという連絡が入りました。早速行ってみると、先端付近の葉がメロン苗と同様な症状で、しかもトンネルの被覆に菰を使っているではありませんか。多分、というはやる気持ちを抑えて、今度は苗をじっくり「観」ました。葉の裏に、メロン苗と同様な小さなコナダニがびっしりと付いていました。営農技術員も、想像をしていなかった原因を私がす

市民タイム

(19) 平成25年(2013年) 11月6日 水曜日

タマネギの苗を植える園児たち

今井保育園 年中園児が苗定植

松本市今井の今井保 供ばかりで、長さ20センチの年の中園児25人は、ほとんどの苗を受け取らずに、信州スライパーと「本当にタマネギの指定管理者・トイボックスに招かれて、園児もいた。順調に育つことを願って、作業に励んだ。」「初めて体験する子」

園児たちが講師を務め、園児に苗を見せて「これがタマネギの赤ちゃんです」と説明した。園児たちは広さ96平方メートルの畑で、手ほどきを受けながら畝に苗を一本ずつ等間隔に植えた。来年6月にタマネギを収穫した後、保育園でカレーライスを作り、スタッフを招いて会食をする。桃井唯斗(4)は「カレーにして食べたいから大きいタマネギができるようにしたい」と楽しみにしていた。

(石川鮎美)

保育園児のタマネギ苗植え付け体験の新聞記事 (長野県松本市市民タイムス紙より)



自然農法センター農業試験場と保育園児との収穫体験交流

ぐさま診断したことから、驚くやら、感心するやらで一件落着となりました。

私はこの経験から、野菜の生育状況を見る時には、必ず葉の裏を「観」ることにしています。害虫の多くは、強い日の光や雨風などを避けるため、葉の裏で行動していることが多いのです。菜園作りでは、ぜひ葉の裏を「観」てください。

### ■キュウリには根がある

当時、県南部にある農業試験場の分場に勤務していた時で、勤め始めて十五年くらい経った頃でしょうか。キュウリ栽培の盛んな県東部の産地から、栽培講習会の講師を務めてくれないかと依頼がきました。この地域は、県北部の須坂市にある園芸試験場の管轄下でしたが、県南部もキュウリ栽培が盛んでしたので、よその情報も知りたいという意向もあったのでしょう。園芸試験場のベテラン研究員の替わりが務まるのかと、当日は不安が先に立つ中で話を始めましたが、案の定農家の人たちの冷やかな視線が感じられ、安易に引き受けたことを後悔しました。しかし、ここで止めるわけにはいきません。どうしようと考えながら、

「見る」と「観る」の話をしてやろうと思いつきました。

「キュウリに限らず、植物には必ず根があります。ところが、根は土の中にあるため、私たちの目には見えません。どのように伸びているのか、健康に生長しているのかいないのかなど、地上部の葉や茎や果実が肉眼で観察できるのに対し、それができません。皆さんは、根が見えないので、地上部の生育ばかりを気にして、根のあることを忘れてはいませんか。地上部が健全に育つには、根が健全に育っていないといけません。見えない根を観ることが大切です。」と問いかけてみました。すると、それまで私語などでざわついていた会場

の空気が一変しました。皆さんの冷やかな視線が、急に真剣な眼差しに変わったのです。講習が終わった後の懇親会では、今年こそは立派なキュウリを作ろうという農家の人たちの熱気で盛り上がりました。

### ■北原白秋の晩年の短歌から

自然農法センターの農業試験場では、毎年十一月末に本科研修生の修了式が行われ、その後にお別れの昼食会が開かれます。職員の方々が、研修生へはなむけの言葉を贈るのが

恒例になっています。私も参加させていただいているのですが、平成二十三年度の修了生へ贈った私の一言を紹介いたします。

「物事は、見るより観ることが大切」これは、たまたま聞いていたNHKのラジオ深夜便「明日へのことば」の中で、もう故人になられました。日本将棋連盟会長であった米長邦雄さんが「見ると観るの違い」を話されたときに引用されたものです。

か黠葉にしづみて匂ふ夏霞

若かる我は見つつ観ざりき

北原白秋

（歌集「黒檜」（昭和十五年）所収）

【解説】黒檜の茂りに深く沈んで匂う夏霞の気配。この深い興趣も、若いころは見ながら、漫然と見すごしてきたものだが。

晩年の歌。青葉でむせかえるような森がうつすらとかすんでいる。若い頃はそれを見ていても観てはいなかった。この歌の頃は、白秋は腎臓を患い失明同然の状態であった。その彼が青葉を観ている。今、この年になってみると、「若かる我は見つつ観ざりき」のことがどれほど多かったかと嘆くほかない。白秋はこの歌を詠んで2年後に他界する。

## ■ 葉の裏をよく「観る」 ■



葉裏に付くインゲンテントウの幼虫



インゲンテントウの成虫



葉裏にびっしり付くアブラムシ



## 季節を大切にしたい菜園作り

自然の中で、季節は毎年同じように巡ってきます。季節の変化を生活の中で生かすことが大切ですが、近年旧暦が季節感が感じられるとして人々の関心を得るようになってきました。旧暦で暮らそうという趣旨の書籍もいくつか出版されています。

旧暦は正確には太陰太陽暦と呼ばれ、今の新暦、つまり太陽暦が明治六年に採用される以前に使用されていたことから、旧暦と呼ばれるようになりました。旧暦の一月は、太陰（月のこと）とあるように月の満ち欠けを基にして決められます。新暦では、太陽の運行（実際には地球の動き）を基に月日が決められますから、若干の誤差がありますが、毎年同じ時期（月日）に同じ季節が巡ってきます。しかし、太陽がどこから昇ってどこに沈むのかは、毎日見ているても十日程度の間ではこの差は分りません。これに対して、夜空に輝く月の出入りは昨日と今日ではつきり区別が付きますし、満ち欠けも数日でかなり変化します。

このように、月の出入りと月の満ち欠けを見れば、旧暦では今日はほ

ぼ何日頃ということが分かります。しかも、夜空にその姿が浮かび幻想的な雰囲気がありますから、なんとなく不安で忙しい近年の生活の中では、旧暦は季節を大切に暮らすという生き方として共感を持って迎えられるのではないでしょうか。

旧暦では、月の満ち欠けの周期は29・5日くらいですから、大の月（30日）と小の月（29日）を組み合わせて一年を十二か月とすると、新暦の365日より一日ほど短い日数の一年となりますから、その調節のために、三年に一度くらいは閏月（うるふつき）を設けることになっています。したがって、旧暦では同じ日と同じ時期に訪れることになりませんから、季節を正しく知ることができません。そこで、正しい季節を知るために二十四節気が設けられています。つまり、二十四節気は月の満ち欠けではなく、太陽の運行を基に決められているのです。これに対し、新暦では季節と連動して毎年同じ月日が巡ってきますから、二十四節気に頼る必要はありません。このような中で、いつのまにか二十四節気は、主要なものを除いて生活の中から忘れられた存在になっているということ

でしょうか。

せっかくですから、二十四節気をすべて挙げてみましょう。「立春・雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨・立夏・小満・芒種・夏至・小暑・大暑・立秋・処暑・白露・秋分・寒露・霜降・立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒」となります。これらは、概ね15日か16日の間隔になっていて、毎年同じ時期に巡ってきます。

二十四節気他に、さらに細分化した七十二候なるものも設けられていますので、ぜひ菜園作りに役立ててみてください。できれば、我が家独自の七十二候を作ってみてはいかがでしょうか。そして、忙しい世の中ではありますが、自然の中の季節の折々を敏感に感じ取り、花鳥風月を愛でる余裕はぜひ持ちたいものです。

（二十四節気も七十二候も、もともと太陰太陽暦とともに中国からもたらされたものです。ですから、日本の季節と合わないところがあるので、暦に関する研究を行っている「暦の会」では、日本の現代に合った七十二候を作成しています。これを含め、暦について詳しく知りたい方は、「現代こよみ読み解き事典」岡

田芳郎、阿久根末忠編著、柏書房などをご覧になってください。）

## 自然農法で未来を拓く

自然農法は、慣行農法のように自然を制御して行うものと異なり、あくまで自然と融和して行う農法です。したがって、自然の摂理に反しないようにすることが大切であると思います。県の農業試験場に勤務をしていた時には、慣行農法に多少の疑問を感じながらも推進してきたことは、自然農法を前にすると、まことに忸怩たる思いがします。

畑に住む様々な生き物との関わりを、栽培する作物が上手に行えるように人が手助けする事が大切であることを自然農法センターの方々と交流の中で学ばせていただきました。高齢化が進む社会構造の中で、先行きに不安のある日本農業をいかにしたらいいのか、簡単に答えは出せないとは思いますが、自然農法センターのみなさん、また自然農法を実践されているみなさんが、しっかりとした理念と気概を持って、日本農業の未来を拓いていけることを期待しております。